

みのりの秋



大分・光徳寺住職
もり とも 智 崇
森 智 崇

私の地元の「早朝」は、穏やかな静寂に包まれた時間、とはいかず、田の草刈りなど農作業の音がリズムよく、時折競い合うように響き渡ります。以前は静かな朝を願いつつ、何もこんなに朝早くから…と思っていました。住職となつて境内の掃除や草木の剪定せんていなどを自分でするようになつて思い知らされました。あれだけの作業、早朝の涼しい時間でしかやっていたのではないのです。お仏飯ぶつぱんでお育てをいただきながら、

なんともお恥ずかしい話です。そんな毎朝のBGMが落ち着き始めた頃、風にのる稲穂の香りや、黄金色に変わった田園風景が実りの秋を感じさせます。そのような田舎の風景を身近に見られない方も、四季折々の水田や黄金色に色づいた田園風景をなんとなく思ひ浮かべることはできるでしょう。お米作りをされているご門徒との出会いによって、実はその一つ一つの田は世代をまたいで、

丹念に自然と向き合つてこられた生き様が結実したものだと気づかされました。

この時期、お参り先では新米のお仏飯そながお供えされていることがあります。見た目だけではさすがにわかりませんが、ほとんどのお宅で「お仏飯は新米です」と教えてくださいます。そして、お米が実るまでのご苦勞を、それぞれにお話ししてくださるのです。豪雨災害の復興後によつと収穫できたこと、祖父に教わった通りのお米作りができたお孫さんの誇らしそうな顔、天候や虫の被害に左右されながらも何とかお米ができたことなど、毎年お話しいただく内容に大切な物語を教えられるます。

「あなた、今年のはどう?」

田のすべての仕事を長年されてきたお連れ合

いさんの毎年の言葉でした。

「おい、今年のはどうか? 俺と子どもたちで刈かったぞ。来年も楽しみにしておけよ。俺もそう長くはないからな、待つとけよ」

まさか反対に自分が言うことになるとは思つてもみなかったその方は、「悲しみの中にも仏事がこんなにもありがたいことだったのか」と、何度も仏前でお話ししてくださいました。

お浄土ごんりゅうを建立された阿弥陀さまは、「あなたはいつでも私とともにある。決して空むなしいのちにはさせない。必ずお浄土に生まれさせる。あなたの大切な人も私とともにある。大切な人の大切な人も私とともにある。すべてのいのちは私とともにあるのだ」と、はたらきつづけてくださいます。阿弥陀さまに抱いだかれ、つつみこ

まれている時間は、ただ悲しく空しく過ぎ去っていただけだった時間の意味が変わっていくことでもあるでしょう。

毎年、「米作りをいつまでできるだろうか…。でも、子どもたちが待っているからねえ」と悩まれるご高齢の方々にも出会います。種まきの時期になると、体調よりも気持ちのほう焦り、無事田植えを終えても稲刈りまでの間、せわしなくお世話をされるお姿を身近に見させていたさきながら、その悩みの深さを思います。

いよいよ田んぼの管理を人に任せた、というお話もお聞きました。てっきり肩の荷がおり、ゆっくりした時間を過ごされているだろうと思っておたずねすると、「いやあ、ぐったりとタガが外れたようになってね」と、これまでにない

ほど元氣のないお声。うつむきながら、自身の使命や役割、だからこそ自立していた自分、そのすべてを失ったような心境を話してくださいました。

思えば私たちは、喪失と不安を繰り返すだけの人生かもしれません。健康な時の生きる目的は必ずしも支えにはならず、一時的な安らぎではなく、私そのままを根こそぎ抱ききる真の依りどころによってのみ、力なくうなだれる私がある。そのままで支えられていきます。

大学一年生の頃、田畑の話ばかりする教授が、しいな枇という、殻ばかりで実のないもみ粃のことを話してくださったことを覚えています。

「枇は周りからはとても立派に立って見えますが、まったく実っていないくて、しなびているの



カット 長井多美栄

です。他の誰でもないあなたが、阿弥陀さまのおみのりに出会わせていただくことは、頭を下げるのではなくて、頭が下がっていく世界なんですよ」

本願ほんがん力にあひぬれば

むなしくすぐるひとぞなき

功德くどくの宝海ほうかいみちみちて

煩惱ぼんのうの濁水じよくすいへだてなし

(註釈版聖典580ページ)

尽きることのないお慈悲の阿弥陀さまは、苦しみや不安にさいなまれ、空しさにただ沈む私のすべてを見抜き通されたうえで、「南無阿弥陀仏」と、お慈悲いっぱいただ今もこの私に満ちあふれてくださっているのです。